

トランスウェブ社の場合 なぜユーラシア大陸横断 を企画したか

西 襄二 文と写真(注記付き)

成田空港に近い千葉県・富里市一帯は、関東平野でもなだらかな起伏が変化をつけている。この一角に株式会社トランスウェブの本社がある。初めて社名を聞いて運輸企業を連想することは難しい。多角化と先進性のヒミツは前沢武代表取締役社長(以下、敬称略)の考え方に根ざしている。

社名の由来

社名のトランスウェブは造語だ。前沢に命名の由来を聞いた。

トランスは輸送、ウェブはインターネットを意味するから、輸送に関する事はわが社に聞けば全て解決する、との意気込みを込めたとの熱い思いを語ってくれた。

インターネットの発展とこれを利用した情報検索機能の発達で、近年、何か調べ物をする時は先ずインターネットの検索サイトにアクセスすることが半ば常識化している。筆者も例外ではない。トランスはトランスポートーション(輸送)の短縮形と考え、ウェブはインターネット上の検索機能を指して慣用されているところから、トランスウェブを社名としたというのは、如何にも現代風でありスピードを感じさせる命名である。

**最高の輸送品質の提供
それが当社の使命**



前沢武代表取締役社長は40歳台と若い。社員はかけがえのない財産であり、顧客に提供する輸送品質を高めるのはこの人達であるとの確固たる信念が経営理念の根底にある(筆者撮影)

(表1) 株式会社トランスウェブ 概要

設立	2001(平成13)年1月
代表者	前沢武代表取締役社長
資本金	20百万円
売上高	2968百万円(平成29年度実績)
従業員	155名
車両保有台数	160台(被牽引車含む)
事業所	本社及び4事業所 (内1か所・PDI*)センター *)輸入車の納車前点検整備

前沢が1992年に若くして自ら物流の要である運輸の世界にとびこみ、モノを運ぶ事の重要性、わけても安全が如何に大切なことか、そしてなにより発・着両側のお客様の満足度をどこまで高め深めてゆけるか、言い替えると最高の輸送品質でお客様の期待に応えることがこの世界の使命であることを確信するに至り、これが自社の運営の原点となっている。

ヒト・モノ・カネが企業経営の三資源といわれ、これにトキ・時間を加えて四資源とする考え方もある。ゆきつくところは、人が運輸企業の最重要資源であることを堅く信ずるところに、自社社員によるユーラシア大陸横断、という壮大なイベントを企画を立案した動機がある。

トランスウェブ社の保有車両は160台余り。殆どが大型車で、それもセミトラクタが多いのが特色だ。けん引するトレーラも数の中に入れており単車は少ない。そして、SCANIA スカニア車が多いことも目立った特色である。

かつて、当社の発足から発展期にさしかかる時期には日野車が多かった。当事、日野自動車はスカニア社と提携関係(2003～2011年)にあり、スカニア車の国内販売も行っていた。これが、当社のスカニア車導入の一つのきっかけとなっている。

その後、スカニア社は自ら日本法人を立ち上げ独自色を鮮明にしたが、当社はこの日本法人との関係を深め、自然な成り行きとして現在は自社で運用する主力車種となっている。

スカニア社の本社はスウェーデンにあり工場の発祥地でもある。現在、日本に入ってくるスカニア車の多くは欧州のオランダ工場で生産され、通常は海



夕刻、本社に戻って明日の出番を待つ車達。現在の主力はスカニア車で使い込んだ車も多い。増車を機会に、社員の経験を広げて当社でなければ得られない研修の場を提供しよう今回の壮大な企画を思い立った(筆者撮影)



車両輸送分野に投入しているECKファンエック社製低床可動2段フロア式セミトレーラ。スーパーカーの輸送にクローズド型ボディは欠かせない選択だが、国産車で当社の要求スペックに見合うものは現在ない(筆者撮影)



最新の車載セミトレは小径タイヤで、使い勝手が一層高い仕様になっている。前沢は第一線の業務に精通しているから、輸送品質を高め顧客満足度を確かなものとする為に選択する機材・車両には自ら厳しい基準を持っている(筆者撮影)

路経由で輸入されている。もし、陸路を走って日本に持ってくるとしたらどんな経路が考えられるか。国内で顧客車両の横持ちやデリバリを手掛けている自分たちで自社向けのスカニア車を運べないか。こんな夢を社員達と共有して具体化出来たらどんなに社内が盛り上がるだろう。この会社はこんなこともできるのだ、として新たな人材の受け入れの道がひろがるのではない。前沢の構想は2年がかりで実現に向けて動き出したのである。それはスカニア社が新型車の世界初公開をバリで行った2016年のことだった。

動き出した壮大計画
理解者の輪、広がる

有力取引先のいくつかが欧州に拠点があること、トラック、トレーラ、輸送機材メーカーがひしめく欧州にしばしば足を運び、彼の地の事情を研究してきた前沢は社内にプロジェクトチームを編成し、走行ルート、道路事情、運行に必要な各地の法規、無事の運行を支える整備上の準備と道中の支援態勢、一緒に導入するトレーラの選定、など手分けして調査と協力者の確保に精力的に動いた。

車は増車を計画中だった2台を想定し、将来の汎用性を年頭に欧州で荷室容積が最大級のカーテンサイダー・セミトレーラをけん引する編成が決まった。スカニア・ジャパン社を通じて欧州のスカニア社の支援が不可欠だったが、この計画を快諾してくれた。出発はオランダ工場を想定していたが、2018年は9月下旬に世界最大級の定評あるIAA商用車展(ドイツ自動車産業協会主催)がドイツ・ハノーファー市で開催されるので、その会場のスカニア社の展示場に出展してここを出発地点としてはとの提案があり、ここがスタート地点に決まった。ただ、トレーラメーカーのECKファンエック社の本拠がオランダであり、ここでヘッドとトレーラを連結して編成が出来上がってIAA会場に送られたことから、全行程のスタート地点はオランダとされた。

ルートはロシア・シベリア経由で

さて、経由ルートの選定では当初、意見が分かれた。中国が提唱している一帯一路・新シルクロード構想の陸路を検証してみようではないか、との意見もあった。一方で、このルートは経由国が多く道路事情も不明なことが多く、通関や通行に要する許可申請が複雑で、ナンバープレートの扱いについても

(表2) ユーラシア大陸横断・運転者一覧

チーム	運転者	役職名	平素の担当業務	走行区間 出発/到着
A	前沢武	代表取締役社長		オランダ ベースト発 ロシア モスクワ着
	佐々木伸也	常務取締役		
	飛田淳司	運転者	車両輸送	
B	大日野史明	整備課係長		ロシア モスクワ発 ロシア イルクーツク着
	桃坂健二	運転者	車両輸送	
	竹下秀俊	運転者	エアカーゴ輸送	
C	皆越祐磨	物流企画課課長		ロシア イルクーツク発 ロシア ウラジオストク着
	田村忠弘	運転者	エアカーゴ輸送	
	白田康彦	運転者	車両輸送	
D	前沢武	代表取締役社長		ロシア ウラジオストク発 日本トランスウェブ本社着
	佐々木伸也	常務取締役		

分からないことが多い、など関心はあっても初めてのユーラシア大陸横断計画に選ぶルートとしては難点が多いとして今回のロシア・シベリア経由で具体化することとなった。

こちらは広大で不明のことも多いが関係国が少なく、手続き上の煩雑さを避けられるとして決まったのである。スカニア社の現地拠点展開状況も参考とした。



トレーラを連結して最後の仕事は目立つオデコに社名ロゴを貼ること



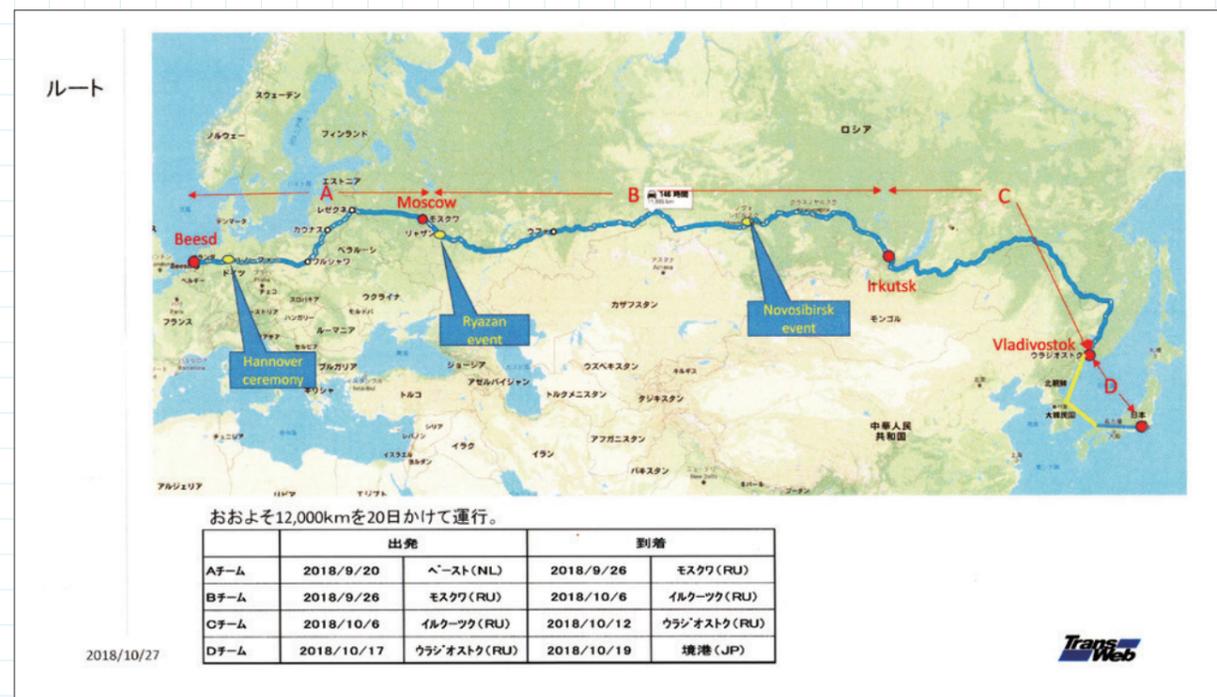
いよいよ長丁場の行程に。まずはドイツを後にポーランドのワルシャワへ



最初の行程は折しもドイツ北部はハノーファーで開催中の世界最大級商用車展「IAA-CV-2018」の会場へ。筆者は取材に忙しく見逃した場面だ



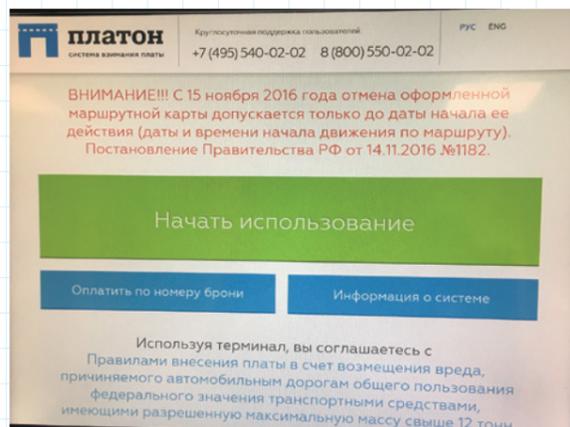
麦畑を貫く一本道。右ハンドル車で右側通行路をひた走る、単調だが緊張



今回の走破ルートは、主としてロシアのシベリア南部ルートを辿り、スカニア社の販売・整備拠点の配置を参考に組み立てられたということが出来る (出展:トランスウェブ社広報資料)



リトアニアを経由してロシアの国境へ。通関を待つトラックの長蛇の列・・・



プラトンと呼ばれる公共道路通行許可書。12トン以上のトラックに必要



AdBlue 液の補給もここで行う。現地車の多くは未だ旧型エンジン搭載車だ



トレーラに AdBlue 液タンクを沢山積んで、補給に困らないように準備した



モスクワ北西郊外に位置するスカニア社の販社で歓迎される。工場での最初の点検も受ける。勿論、どこにも異常はなし



モスクワ市内にて。衛兵と共に A、B チーム引継ぎを行う



ここまで2,600km超を走行したので各部の点検を現地販社工場で行う



道路工事で未舗装区間が時々現れる。久しぶりにこんな道も走ることに・・・



販社の会議室で現地メディアの取材を受ける。これから遙々シベリアを横断してウラジオストク迄走ること取材陣もいささか驚いていた・・・



現地の燃料補給所。為替相場は2月24日現在、1円が約1.7ルーブル・・・



産油国でもあるロシアの補給所。トラックは夜も走るのは何処の国でも・・・



B チーム最後の区間を走りきって夕食一杯。交替無しに11時間以上走る日も3日を数えた B チーム、ご苦労さまでした・・・

IAA 会場を後にした2台は、隣国ポーランドの首都ワルシャワ、リトアニアのカウナス、ラトビアのレゼクネなどを経由してロシアに入り、モスクワ、リヤザン、その後ウラル山脈を越えてシベリアに入り、オムスク、ケメローヴァ、イルクー

ツクの各地を、緯度にしてほぼ北緯 55 ~ 65 度線に沿う経路をひた走り、最後は南下してウラジオストクに至りユーラシア大陸横断を達成。その後海路で韓国・東海港を経由して鳥取県・境港へ上陸。その後陸路で富里市のトランスウェブ

本社へ到着するという全行程約13,500kmに及んだ大走破行が完了したのである。

トランスウェブ社内のプロジェクトチームは抜擢されたドライバー5名、現場の管理職2名、それに前沢社長と佐々木常務を加えて9名4班が乗務

担当となり、ほぼ全社を挙げての直接・間接の参加者となった。経由国の交通事情、通関手続き、仮ナンバーの取得方法など事前の調査に万全を期した。

取引先のスカニア社は経由各国の販社に立ち寄った際の点検、駐車場の便宜を計らうよう手筈を整え



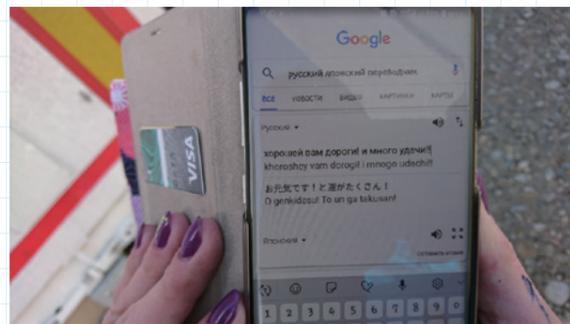
スウェーデンのイルクーツクの支店に到着。寒さ対策でしっかりしたドアが・・・



2018年10月8日、イルクーツクのスカニア支店でCチームに引継ぎ。現地スタッフとともに記念撮影



現地女性スタッフが記念に一言書き込んでくれた。日本に行きたいそうだ



スマホの翻訳アプリで、彼女が歓迎の気持ちを伝えてくれた。ありがとう!



スウェーデンのイルクーツクの支店に到着。寒さ対策でしっかりしたドアが・・・



スカニア車を駆る現地のドライバーが興味津々で話しかけてきた



現地のドライブイン食堂の例。ドライバー向けの代表的メニューが



10月12日。長い上り坂の両側は冷え込みで霧氷を付けた木立が続く



同日、ウラジオストクに到着。長かったロシアの道中も終点にきた



高台から望むウラジオストク港。左手に見える対岸への橋は日本の経済協力で近年完成した



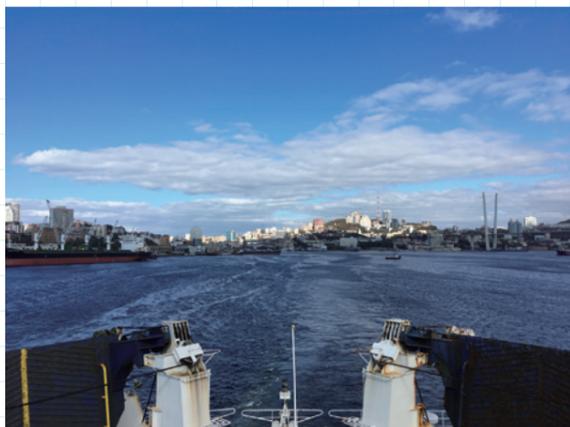
港内の待機場場に乗り入れた2台。ここまで凡そ12,600km余を走った



ウラジオストク市内には日本の中古車が沢山走っている。ペイントもそのままという車も珍しくない



いよいよロシアの地ともお別れ。RORO船で韓国経由でわが日本へ・・・



さあ、ウラジオストク港を後に日本海へ。しばし感慨にふける一時だった



・・・境港へ入港。接岸間近なるも人影が少ない



この車達としては初めての日本の道路を走って最初の燃料補給所へ



大阪営業所、豊橋営業所で夫々報告会を行って久しぶりの東京を通過・・・



遂に富里市の本社に到着した。時は2018年2月21日0時15分、積算計は13,515kmを表示していた・・・

た。日本ミシュランタイヤ社はタイヤ管理の要点を乗務担当者に指南し、安全走行と不測の事態にも対処できる技術サポートを提供した。

道路事情が良く分かっていない広大なロシア・シベリア地域の走行も想定して不測事態への対応についてイサカ社は惜しまず支援を申し出てくれた。

海上部分については、STORM MARINE ストームマリン、上組の各社がこの大型連結車の安全な輸送に万全を尽くしてくれた。

こうして得た多くの支援者と協力者の後押しがあったから、この一大イベントも無事成功出来たといえる。

経由地の仲間達との交流

2018年9月20にオランダピースト市を出発し、10月19日に境港に上陸するまでの丸1ヶ月は永いようで短く感じた期間だったという。国内では20日に大阪支店、21日に名古屋支店でそれぞれ報告会を開催した後、その日の内に東京の繁華街を經由して富里の本社まで一気に走りきった。これまで大型連結車では誰も経験したことが無い、全行程日本人によるユーラシア大陸の自走横断走行はここに完結したのである。

経由したドイツ、オランダ、ポーランド、リトアニア、ラトビア、そして長いながいロシアの各地で、現地のドライバー達との交流も忘れがたい思い出となった。国は異なっても、運輸という物流の基幹部分を担うドライバー達の気持ちは言葉の壁はあっても通じ合うものだということが証明された。

取材を通じて多くのエピソードが語られたが、その内のいくつかを紹介しよう。

■今回の計画がオランダのトラック雑誌のインターネットニュースサイトを通じて、ヨーロッパと近隣諸国へ情報が発信されました。これが彼の地のドライバー達の間で広く拡散共有されたようで、高速道路のパーキングエリアで停車する度に写真を撮られたり声を掛けられたりしました。同じ仕事をする彼の地のドライバー達にも夢を与えることが出来たことが最大の成果でした。

■リトアニアからロシアに入る国境では、ロシア、ベラルーシのドライバー達が、手続きに関してサ

ポートしてくれました。言葉の壁、国家の壁、文化の壁などは微塵も感ずることなく、同じドライバーとして困った時はお互い様、と気持良く接してくれたことには感激しました。日本では薄れたように感じられる、20年以上前のトラック野郎の熱い気持ちを思い出す場面が度々ありました。

■ロシアの税関ではスマートホンの翻訳アプリを利用しました。「ロシアは寒い!」「ロシアは広すぎる!」などのロシア語の音声に聞き入り、笑いの渦になりました。人間の出会いというのはこんなにも素晴らしいものなのか、ということを感じたことも何度も実感しました。

当社の先進性と堅実性

今回の取材を通じて筆者が心を打たれたことを整理してみよう。

明確なことは、前沢が確固たる経営理念を表明し現場に精通し、顧客に最高の輸送品質で応えることを絶えず追い求めていることだろう。

そして、物流の要と言うべき輸送の品質はドライバーが創り出すもので、会社のかげがえの無い財産として彼等を導くことに腐心している姿勢である。財産と言え大型トラックとトレーラは当社の機材の中心にあり、これも輸送品質を保証し高めるカギであるが、技術に通じていた父君の影響を受け継いで納得のゆく先進を追い求めていることだ。こうしたことを通じて特色有る荷主を顧客として先進的な経営を展開している。輸入車のPD(納入前点検業務)部門を持つなどは多角化にも通じている。

社内の取材時に整備工場に入場していたトレーラは、既に20年近く使い込んだセミトレだったが見事に整備されており、この部門の運営を通じて堅実性にも重点をおいたマネジメントが行われていることが察しられた。

当社に課題があるとすれば、前沢の秀でた経営感覚を同じレベルで発揮できる人材の育成だと思うが、既に新たな観点で動き出しているようにも感じられた今回の取材であった。(次頁に全行程と日程を示す)

＝お断り＝ 特記なき写真はトランスウェブ社の提供による

(表 3) ユーラシア大陸横断：日程と経由地

月/日	経由地	担当	特記事項(走行距離はウェブマップの表示による)
9/20	オランダ・ペースト発 ドイツ・メレ着	A チーム	E30 号線経由 250km 2 時間 38 分
21	ドイツ・メレ発 ドイツ・ハノーファー着	A チーム	E30 号線経由 149km 2 時間 04 分 IAA 商用車展 2018 会場に展示
22~23	ドイツ・ハノーファー市滞在		IAA 商用車展 2018 会場・SCANIA 社スタントに展示
24	ドイツ・ハノーファー発 ポーランド・クノト着	A チーム	E45 号線経由 682km 6 時間 14 分
25	ポーランド・クノト発 リトアニア・ヴィルシ着	A チーム	A2 号線経由 906km 10 時間 49 分
26	リトアニア・ヴィルシ発 ロシア・ヴェルーキエ ルーキ着	A チーム	E22 号線経由 191km 2 時間 13 分
27	ロシア・ヴェルーキエ ルーキ発 ロシア・モスクワ北西部着	A チーム	E22 / E105 号線経由 468km 6 時間 01 分 A チーム累計走行距離=2,646km
28	ロシア・モスクワ北西部発 ロシア・リャザニスカン着	B チーム	E105 / E30 E 経由 202km 5 時間 06 分
29	ロシア・リャザニスカン発 サマラ北東近郊着	B チーム	ローカル国道経由 963km 11 時間 19 分
30	ロシア・サマラ東近郊発 ロシア・カフェオーチャグウラ着	B チーム	ローカル国道経由 839km 10 時間 50 分
10/1	ロシア・カフェオーチャグウラ発 ロシア・オムスク南東部着	B チーム	ローカル国道経由 911km 11 時間 31 分
2	ロシア・オムスク南東部発 ロシア・ノボシビルクス着	B チーム	ローカル国道経由 622km 7 時間 33 分
3	休養日	B チーム	
4	ロシア・ノボシビルクス発 ロシア・シュレスノゴルスク西南部着	B チーム	ローカル国道経由 947km 12 時間 36 分
5	ロシア・シュレスノゴルスク西南部発 ロシア・アラルスキーライオン着	B チーム	ローカル国道経由 880km 11 時間 19 分
6	ロシア・アラルスキーライオン発 ロシア・バクレイナヤ着	B チーム	ローカル国道経由 173km 2 時間 27 分 SCANIA 支店訪問 B チーム累計走行距離 5,537km
7	休養日		
8	ロシア・バクレイナヤ発 ロシア・ヒロク着	C チーム	ローカル国道経由 796km 11 時間 46 分
9	ロシア・ヒロク発 ロシア・モゴチンスキーライオン着	C チーム	ローカル国道経由 901km 11 時間 06 分
10	ロシア・モゴチンスキーライオン発 ロシア・P297 地点着	C チーム	ローカル国道経由 957km 11 時間 02 分
11	ロシア・P297 地点発 ロシア・ウラジオストク着	C チーム	ローカル国道経由 1,336km 15 時間 59 分 C チーム累計走行距離 3,990km
12~18	待機・海上輸送 ウラジオストク(韓国経由)→境港市		
19	境港市発 トランスウェブ社大阪営業所着	D チーム	国道 9、53、29 号線経由 287km 4 時間 07 分
20	トランスウェブ社大阪営業所発 トランスウェブ社豊橋営業所着	D チーム	名神高速道経由 222km 3 時間 03 分
21	トランスウェブ社豊橋営業所発 トランスウェブ社本社着	D チーム	東名高速道経由 364km 4 時間 49 分 D チーム累計走行距離 873km
全日程 32 日間	ハンドル日数 21 日間 海上輸送日数 7 日間 展示・休養日数 4 日間		本表記載総計走行距離 13,046km 上記の平均走行距離 621km/日 メーター読み総走行距離 13,546km

＝トランスウェブ社研究・おわり＝

平成 26 年 4 月よりバイオオイル標準充填開始。
環境マネジメント対策に適しております。
万が一、自然界に排出されても、二酸化炭素と水になります。

Palette Roller パレットローラー

標準装備 落下事故防止に自動パレットストッパー

- 上昇時パレットストッパーが自動的に浮き上がり、ローラー止まり忘れによる落下事故を防止します。
- ストッパーの解除はローラー上昇後にプッシュボタンを押してワンタッチ操作で解除できます。解除後は自動積込も対応可能です。

シリンダー戻り配管装置

- オーバーフローの油は戻り配管を通じてタンクに戻ります。
- 気密性の高いシリンダー BOX が外部へ油を漏らしません。黒いゴムを外せば BOX 内清掃が簡単に行えます。

パワーユニット

- 軽量コンパクトなステンレス製 BOX にセット。防雨・防錆も完璧。平成 25 年マーキングリニューアル。ユニットカバーを外さなくても黒いゴムを外せば油量ゲージ確認が出来ます。

警告ランプ/キャブ内スイッチ

- キャブ内警告ランプによりローラー下げ忘れを確認出来ます。

**バイオオイル使用
ローラー車**

自然界に排出されても**生分解が高い**
環境にやさしい**オイル**を使用しています

オイル名: コスモテラフルード E46
エコマーク登録番号: 04 110 042
コスモ石油/ブリクソン株式会社

車輻機器株式会社
TEL 046 (257) 8800
http://www.sharyoukiki.co.jp/

2つの標準装備で

戻り配管装置

バイオオイル

**油圧ローラー
安心の
プライムパワー**



製造・発売元
車輻機器株式会社
〒252-0003 神奈川県座間市ひばりが丘5丁目1-6
TEL 046 (257) 8800 (代) FAX 046 (257) 8811